

# 文化財の被害と保全活動

震災後、被災した古民家や土蔵の解体に伴い、中に残された民具や古文書などの貴重な文化財を保全しようと、多くの方のご協力により救出活動等が行われました。



文化財の救出作業の様子

## 震災後の文化財の救出・保全活動について

私は13年前から秋山郷関係の歴史史料（古文書）調査で栄村に通い続け、震災のあった年度まで5年間は、地形学・林学・生態学など理科系分野の方々も含めて、共に栄村の自然と人間との関わり の歴史について調べてきました。そして、毎年3月にはその年度の最新成果を村民の皆様に表示する報告会を開いてきました。その第5回目（最終回）の報告会を役場ホールで開いた1週間後のことで

した。震災が栄村を襲ったのです。長くご縁があり、お世話になってきた栄村が甚大な被害に見舞われる中、何かお役に立てることはなにかと思い、専門を生かした文化財の救出・保全活動を仲間と共に始めました。やがてその活動は「地域史料保全有志の会」（以下「保全の会」という。）の結成に至り、村民の方々をはじめ、長野県内はもとより首都圏の博物館・資料館の学芸員の方々、大学・高校の教

地域史料保全有志の会  
中央学院大学

しろうず さとし  
白水 智 准教授

保全の会の活動内容や状況については  
ブログで公開しています。  
<http://ameblo.jp/shiryouhozen/>



員の方々などを中心とする多数の皆様のご協力を得て、これまでほぼ毎月の活動を継続することができました。この会は参加者全員がまったくの有志・手弁当で活動しているもので、栄村の文化財を残し、文化を継承させていきたいとの思いでつながっている仲間の集まりです。

栄村は震災により多数の住宅や倉庫などが被害を受けましたが、中でも歴史ある古民家や土蔵の多くが地震で傷み、解体を余儀なくされました。これは栄村にとって3つの意味で大きな文化の喪失を意味しています。1つは100年以上も経た古民家や土蔵の古建築としての喪失です。地元材を使い、豪雪に耐える頑丈な造りの、当地ならではの建築が失われ、どこにもあるような今風の住宅に変

わっていきます。2つ目は、古民家や土蔵のある美しい農村景観の喪失です。栄村が「にほんの里100選」に選ばれた1つの要因も古民家の点在するその風景にありました。地元の歴史を象徴し、まるで自然の一部であるかのように古建築は風景に溶け込んでその一部をなしていました。それが次々に解体されて、景観は大きく変わってしまいました。3つ目

には、古民家や土蔵の中に残されてきた昔の道具や食器など身近な民具、そして昔のことを書き記した貴重な古文書が建物の解体と一緒に廃棄されてしまったことです。先人が村でどのように生き、仕事をし、自然と折り合いをつけながら暮らしてきたか、どのような支配者のもとでいかなる苦勞があったのか、そういった地域の歩みを

語るのが昔人が書き残した多数の古文書です。木箱や箆笥にしまい込まれていたそれら貴重な書類も、古い紙くずとして顧みられないままゴミにされたり、燃やされたりしたと聞いています。もちろん古民家は現代生活をする上では暮らしにくい部分もあり、所有者としてはいずれは解体を考えていた方も多いでしょう。それが単に早

まっただけかもしれません。しかし、古民家の解体によって「栄村らしさ」がまた一つ失われていくのは確かなことです。

私たちは古民家の屋根裏にもぐり、あるいは崩れかけた土蔵に入り、ススや埃だらけになって懸命に文化財を救い出す作業を行いました。文化財というと何か堅い感じがしますが、それは先に述べた古文書や民具のことです。歴史と文化の厚みを持つ「栄村らしさ」





■国道117号 北沢橋



被災状況（平成23年3月）



復旧状況（平成23年11月）

■県道長瀬横倉（停）線 長瀬



被災状況（平成23年3月）



復旧状況（平成24年10月）

■県道箕作飯山線 清水河原スノーシェッド



被災状況（平成23年3月）



復旧状況（平成24年9月）

■村道天代坪野線 天代



被災状況（平成23年3月）



復旧状況（平成23年12月）

第4章

被害状況と復旧の取組み

主な被災箇所への復旧状況



救出された民具

を形にして表したものと、とってもいいかもしれません。私たちはできるだけ多くを救出しようとしたが、運び出したものを保管する場所の不足や現場の危険性などもあり、多くのものをその場に置いて来ざるを得ませんでした。それでも教育委員会をはじめとす

る役場職員の皆様、村民有志の方々の手引きによって40軒ほどの個人宅や寺院をお訪ねし、このうち半分以上の場所から文化財を救出することができました。これらは今、志久見地区にある旧東部小学校分校の建物内に溢れんばかりに多量に保管されています。

震災からまもなく2年が経とうとしている現在、文化財の緊急救出の作業はなくなりましたが、今はより地味な、しかしとても大切な作業が中心を占めています。それは救出した文化財の整理作業です。今は、数万点にのぼると考えられる古文書や膨大な数の民具をリスト化しています。これには今後少なくとも数年はかかると思われますが、しかしただ整理して終わりでは、何のための整理か、何のための保全かわかりません。私たちは救出し、保全した文化財を生かして、村の文化のすばらしさをより多くの方々に知っていただき、またそれを後の時代に継承していくことが何よりも大切なことだと考えています。そこで、震災の翌年からは栄小学校のご協力を得て、村の次世代を担う子供たちに文化財教室を開き、民具や古文書のことを伝える仕事も始めています。また、村長をはじめとする村のご理解を得て、今後は震災を機に救出した文化財などをしっかりと保存・整理し、それらを生かしていくための拠点づくりを数年かけて進めていこうと考えています。



救出された文化財の整理作業の様子

私はこれからも可能な限り栄村に通い続け、今後ともできる限りの役目を果たしたいと思っています。しかし最終的にこれらの文化を残し、伝えていくのは地元栄村の皆さんです。栄村の歴史や文化に興味のある方、昔の衣食住に関わる道具類や昔の書き物などに興味のある方には、ぜひ私たちと一緒にすぐれた先人の文化を掘り起こす活動を共にしていただきたいと思います。



# 集落の復旧・復興に向けた取組み

長野県北部地震では、地域の拠り所である公民館や神社などにも大きな被害を受けました。各集落では、地域の絆を再確認するとともに、復旧にとどまらない復興に向けた取組みが行われています。

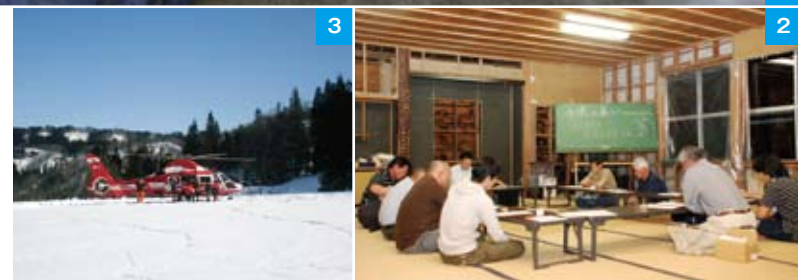


震災前は17戸、50人程が仲良く  
まとまりのよい集落だった。

1

2

- 1 雪崩等で村道がふさがり、一時孤立した小滝地区では、救助されるまで共同車で過ごした
- 2 集落の復興に向けた寄合い「小滝の集い」の様子
- 3 ヘリコプターでの救助の様子



小滝区長（当時）

ひぐちまさゆき  
樋口 正幸さん

## 安否確認は

### アツという間に

ドッカーン！ガンッガンッガンッ！突然の出来事に目を覚ますと頭の横には重いタンスが飛んできていました。ゾッとしました。幸いにも家中の電気がついていたんです。窓がない、何だ？どうしたんだ？外から近所の人の声が直接聞こえるんです。「大丈夫かー」地震だ！外に出なければ、とスキーウェアを着込み出ようにも足の踏み場もない。よく足をケガせ

ずに出られたなと思いました。玄関の戸も吹っ飛んでいたので、スムーズ？に脱出できました。近所の人の確認をして、一人暮らしの年寄りの救出、寝たきりの方がいる家への確認に動きまわった。全員がいつもの場所に集まった頃、明くなり始め、安否確認。「いつも集まる所に集まる」これが安否確認を速やかにできた要因です。それから途方に暮れたわけですが、なんせ情報が全くないので、どこで何があったかわからないんです。牛舎では牛が建物の下敷きになり、唸っていました。

食べるものを持ち寄り、一番安全だろうと思われる鉄骨造の共同車庫で過ごしました。問題はトイレでした。水洗トイレは使えなかったため、汲み取り式トイレのある被害の少ない家を提供しました。避難指示が出たが、隣の集落までの道路が雪崩でふさがり、雪



被災した小滝公民館



修復後の小滝公民館

崩の危険で通れないので、全員をヘリコプターで救出となりました。10時間後ようやく避難所に行くことができました。（近くのヘリは東北に行ってしまった、関西からのヘリだったのです）

避難所は北信小学校だったので、一つの教室が小滝地区に与えられました。集落が一つの部屋に居るとい環境がありがたい事でした。避難指示が解除され、戻れる人は家に帰りました。家に帰ったのは若い人たちで、残ったのは年寄りが多く、問題が浮き彫りになりました。「不安感と足腰が悪く、配給される弁当の運搬もままなら

ない。相談に乗ってほしい。」何でも集落みんなで相談して取り組んできた小滝らしさがここに出ました。即全員が集まり相談し、若い人が交代で当直して対応することにしたんです。

## みんなの気持ちを

### ひとつに

バラバラに散らばってしまった集落の人たちの気持ちをひとつにしたい。仲間の絆を再確認してもらいたいと、招待を受けたホテルに3月末に集落全員で行きました。この全員で行こうということが大切なんです。あつたかいご飯にみんなの顔

## 小滝復興プロジェクト

### チームの結成

これから集落をどうしていくか、将来構想をどうするか、今後を担う人たちで考えていくこととしました。被害状況を確認し、その対応について担当班を組んで検討しました。田んぼの作付けのこと、夏祭りのこと、公民館や神社など公共物の修復のことなど速やかに把握でき、対応することができました。復旧には1億5千万円との被害額も算出したのです。

ボランティアで応援してくれた人に声をかけ、田植え後の田休みに竹の子狩りをいつもに増して盛大に行いました。夏祭りは若者たちが「こんな時だからこそヤル！」

## 復旧に終わらせない！ 復興に向かって

小滝集落では、この震災を機にさらに住みよい集落づくりに取り組み始めました。地域資源の再確認、再発見、活用へと。

平成24年12月1日に全員がようやく戻ってきましたので、お茶飲み会をしました。復興に向けて、これから12月1日は復興記念日とすることにしました。

「地震がもっと早く来てればよかったな」と笑い話ができる日が夢見て：



# 長野県北部地震の被災調査と震災復興計画を作成して

## はじめに

地震から2年目を迎えようとしている。地震直後に農地の被害調査を行い、その後に全水田区画の土地利用調査等を実施した。そして昨年は、震災復興計画の準備と作成のために、毎週のように栄村に通った。そんなことを思いながら筆をとっている。この2年間の栄村への関わりから、栄村の復興と復興計画作成の意図を知ってもらえればと思う。

## 現地調査の出発点

### 「吉楽での勉強会」

私たちは、震災直後から、地震被害の特性を踏まえた震災復旧や復興をしてほしいと、長野県や栄村に働きかけてきた。栄村での震災

調査の始まりは、雪解けの進んだ4月26日の住民勉強会である。これは、震災から立ち上がった旅館「吉楽」の食堂での開催であった。NPO法人栄村ネットワークの呼びかけで、参加者は20人ほどと少なかったが、中には住宅の全壊被害を受けた人もいた。

勉強会では、今までの阪神・淡路大震災や中越地震の調査の経験を踏まえて、話題提供をした。その時の要旨には、「被害の多様性と農家への総合対策、農地・ため池等の被害、災害復旧事業のあり方、村の復興ビジョンと復興計画」などを示した。既に栄村の復興計画の必要性和その内容の骨子を示したかのごとくであった。

しかし、参加された皆さんは住宅の被害も大きく、農地の被害が大きそうだと感じていた段階であり、こんな話しを聞いて、ますます

気が滅入るばかりだったのではないかと気になったりもした。

震災被害の話をしたが、住民も役場も震災経験がなく、被害の特性を認識することはできなかった。そのため、「たいした被害ではない」として、代かき作業を行った農家もあつたという。その結果は、「全く水が溜まらない」「どうしよう」と悩んでいるという話も伝わってきた。

## 小滝地区での被災調査と全村土地利用調査

この勉強会が契機となって、小滝地区での住民との共同調査が始まった。住民は、震災は初めて。これは、村や県にとつても同様であった。それ故、地震による農地被害の実態を知ってもらい、それを基に復旧事業や今後の営農を考えてもらいたい、そんな思いで調査を始めたのである。

調査や工事設計等でも利用された。それによつて、村や県が想定した以上の大きな災害が生じていることが判明し、災害復旧事業の箇所は倍増したのである。

災害復旧事業は、9月下旬から本格化した。12月中旬には根雪になつて工事は中断した。工事期間は2か月半しかなかったが、農地の半分近くの箇所の工事が終了した。これは、担当者や施工業者の努力の結果であつた。

しかし、こうした努力にも関わらず、①復旧工事と営農との調整、②工事の進捗状況の把握等の問題が生じた。特に、「今年の工事はどこまでできたのか」これを明確にすることで、来年以降の工事の段取りや作付けの段取りが可能になる。こうした調査を行うべきだと、再三にわたつて村に勧めたが、人手もななくその方法も分からず、村では実施できなかった。

そこで、私たち信州大学が独自に、全村で約6,500の水田区画の土地利用調査を実施したのである。教員、学生延べ60人を動員して、災害復旧事業や県単・村単の復旧事業がどの区画で行われた

のか、そこでは作付けか休耕かなどを調査し、その結果を図示（「栄村震災復興計画」18・19頁に掲載）した。

## 何故、「調査」にこだわるのか

震災復興計画を作成するには、被害の詳細な把握が欠かせない。栄村の被害は多岐にわたつたが、被害は対象毎に担当係で把握され、復旧も各係単位であつた。そのため、村全体の被害・復旧を総合的に把握することはなかなか難しかった。また、総合的に見ようとすると、数字だけでは十分でなかった。それに対応するため、被害を図面で示す。即ち「目に見える形で把握する」ことにした。震災復興計画の作成では、何枚もの図面が作られた。

『調査し、それを踏まえて問題点を把握する。そして計画づくりをする』おそらく、栄村では初めての経験だろう。

図面化することで、今まで見えなかつた集落や農地の被害・問題点が見えてきた。集落単位に、「全壊」「大規模半壊」「半壊」「一部損壊」

の区分図を作成し、どのように解体撤去されたのかを示し、新築状況図などを作成した。これによつて、周囲が撤去されて、孤立してしまつた住宅があつたり、ここでは、冬期間の除雪困難、除雪体制のあり方などの問題が明らかになった。また、農地の復旧工事の状況を図示することで、工事の進捗状況や集落毎の異なり等が明確になった。それによつて、①担当者は、工事がどこまで進んだかの把握が可能になり、地元への説明も容易になった。②施工業者も、春からの工事の段取り、役場との調整がスムーズになった。③2年続きで耕作できない区画の把握ができ、個々の農家の対応から集落としての対応を可能にしたのである。

## こうしてできた

### 震災復興計画

### そして今後の対応

このように集落の被害を把握して、震災復興計画が作成された。多様で複合的な被害の状況が認識できなければ、それは復旧に留まつてしまう。総合的な復興には、多

様で複合的な被害の認識が不可欠であつた。これを基に他の分野の事業との関連性をもち、総合的な震災復興計画が作られたのである。

このようにして「震災復興計画（案）」は、平成24年9月6日に村長に答申され、10月に正式に「震災復興計画」となったのである。それから半年が過ぎようとしている。

震災復興計画は策定されたが、これを如何に実行していくかが現在の課題である。村長への答申に際して、復興計画策定委員会の意見として、①震災復興計画の目標に沿う形で、各種事業の導入を検討する組織（復興計画推進室、復興推進委員会）の整備とそれへの外部の専門家等の参加、②個別の事業に留まらず、他の事業も関連付けて検討すること。それが係毎の個別的、縦割り型の事業導入の弊害排除になると、強く要望された。

さて、これが実際に行われ、「復興」に向かうのかどうか、今が栄村の正念場だと思つている。

栄村震災復興計画策定委員会  
委員長  
信州大学農学部

名誉教授  
和弘 木村 名  
かずひろ  
きむら





# 復興の願いを込めた「福幸そば」

ふっこう



信州大学の学生が  
包装をデザインした  
乾麺(写真上)  
栄中学校の生徒が  
発案したカップ麺  
(写真下)

震災で水稲の作付けができなかった農地の荒廃等を防ぐために、信州大学の学生ボランティアや県、JA等の協力を得て、そばを栽培しました。(平成23年:27ヘクタール、平成24年:36ヘクタール)

ち、そして少しでも全国の皆さんが「幸福」であればとの願いを込め、『福幸(ふっこう)そば』と名付けました。村はその一部を買取り、震災後に村を支援していただいた方々に贈るとともに、一般にも販売されました。



信州大学の学生ボランティア(農援隊)によるそばの種蒔き

で中学生から提案のあったカップ麺を商品化し、販売されました。村では、その内の2万個を「被災

地から被災地への支援」ということで、東日本大震災で被災した福島市に届けました。



そばの刈り取り作業